

117 高齢者における心臓弁逆流の発生頻度と病態生理

○奥村 望(おくむら のぞみ)¹⁾、渡辺 拓弥¹⁾、山口 真奈¹⁾、加藤 和子¹⁾、宮田 聖子²⁾、野田 明子¹⁾²⁾

1) 中部大学大学院 生命健康科学研究科、2) 中部大学 臨床検査技術教育・実習センター

【はじめに】心臓弁逆流の発生頻度は加齢とともに増加する。心臓弁逆流には、症状を呈するものと無症状で発生しているものがある。無症候性の大動脈弁閉鎖不全症は重症度が高くても、左室機能が低下していなければ死亡率には有意に影響しないと報告されている。

【目的】今回、心エコー法により高齢者における無症候性の大動脈弁逆流と僧帽弁逆流の発生頻度とその病態生理について検討した。

【方法】対象は、地域在住高齢者139例(男性97例、女性42例；年齢70.1±4.3歳)であった。中部大学倫理委員会の承認後、対象者に十分な説明の上、同意を得て行った。対象者には、事前にアンケートで高血圧症、脂質代謝異常症および糖尿病の既往歴等、基礎疾患の有無を確認した。大動脈弁逆流および僧帽弁逆流の重症度評価は、カラードブラ法を用い行われた。また、左室収縮能はMモード法および断層法により、左室拡張能はパルスドブラ法により、各々評価された。

【結果】大動脈弁逆流および僧帽弁逆流の発生頻度は各々全体の38.1%と60.4%であった。大動脈弁逆流が検出された群ではそれが検出されなかった群に比し、高血圧症の合併頻度は有意に高値を示した(47.2% vs 29.1%, $P=0.036$)。一方、高血圧症の合併頻度は、僧帽弁逆流が検出された群とそれが検出されなかった両群間において有意な差を示さなかった。脂質代謝異常症および糖尿病の合併頻度は、大動脈弁逆流および僧帽弁逆流の検出との間に有意な関係は認められなかった。

【考察】高血圧症は、高齢者の大動脈弁逆流の発症リスクと密接に関係している可能性が考えられた。

118 ミャンマーにおける胃腸炎小児患者由来ヒトロタウイルスのGタイプおよびPタイプの分布状況

○富田 万祐子(とみた まゆこ)¹⁾、守口 匡子²⁾、河本 聡志²⁾、ラハマン・ショフィクル³⁾、ヌグエン・バン・サー³⁾、梅田 浩二³⁾、小熊 恵二⁴⁾、松井 太衛¹⁾、谷口 孝喜²⁾

1) 藤田保健衛生大学大学院 保健学研究科、2) 藤田保健衛生大学 医学部 ウイルス 寄生虫学、3) 株式会社イーダブルニュートリション・ジャパン、4) 岡山大学 医歯薬学総合研究科 病原細菌学

【背景】ロタウイルスは冬季乳幼児嘔吐下痢症の病原ウイルスである。ロタウイルス胃腸炎により、開発途上国を中心に年間50万人の死亡が算定されている。開発国での死亡例はわずかであるが、重症化による入院例が多いことから、医療経済の面でも重視されている。そこで、2006年に2種類の経口生ワクチンが開発され、すでに100カ国以上で認可されている。

【目的】ロタウイルスの血清型は多様であり、動物を含めると、VP7が規定するGタイプは27種、VP4が規定するPタイプは35種が報告されており、ヒトでもそれぞれ約10種の存在が知られている。血清型の分布は地域や年によって異なり、ワクチンの有効性やワクチン導入による分布への影響を把握するために、ワクチン導入前後の血清型分布の調査を行うことは有益である。そこで今回、ミャンマーのロタウイルス胃腸炎患児から収集した便由来ロタウイルスのGタイプおよびPタイプを決定した。

【材料と方法】2011年1月～3月に収集した、ミャンマーのDefense Services Obstetrics, Gynecology and Children Hospitalでの生後2ヵ月～3歳の胃腸炎小児患者便

の中で、ロタウイルス陽性の便54例を使用し、RT-PCRによりGタイプおよびPタイプを決定した。

【結果】Gタイプピングでは、G2:24例、G12:17例、G1:1例、G2+G12:12例であった。一方、Pタイプピングでは、P[4]:29例、P[8]:16例、P[6]:4例、P[9]:1例、P[4]+P[8]:4例であった。GタイプとPタイプの組み合わせでは、G2P[4]、G12P[6]、G12P[8]、G12P[9]がみられ、G12では多様なPタイプとの組合せの存在が示された。また、G12のウイルス株を培養細胞に馴化することができた。

【考察】わが国ではこれまでに2例しか検出されていないきわめて稀なGタイプであるG12株が、混合感染例も合わせて54例中29例と高頻度に得られたこと、また、多くの国で10%程度であるG2P[4]のロタウイルスが50%以上も検出されるなど、ミャンマーでのGタイプ、Pタイプの分布がかなり特異であった。こうした特異なGタイプ、Pタイプ分布の背景を調査すること、ワクチン導入後、Gタイプ、Pタイプの分布がどのように変化するかを調査することは興味深い。